

**国民
無視**

「師走総選挙」自民250台なら退陣か
安倍の大義なき「自爆解散」

サンデー毎日

大正11年3月31日第三種郵便物
2014年11月30日発行 第93巻第52号 通巻5295号
毎週火曜日発行(11月18日発売)

11.30号

定価 380円

腸に効くヨガ
完全図解付き

徹底検証 今でも十分低い
大企業の法人税

宝塚歌劇100年
トップの孤独・凰稀かなめ

共倒れしない!介護
「要介護5」でも旅行を楽しむ

忍び寄る**貧困老後**の現実

**持ち家が老後を
破壊する!**

原田 美枝子

「介護旅行」で人生を楽しむ

金澤 匠

「思い出の場所にもう一度行きたい」。体が不自由だからと諦めてはいませんか。そんなときは介護旅行の専門会社を頼りたい。介護福祉士や看護師などの資格を持つ「トラベルヘルパー」が旅の手助けをしてくれます。

神奈川県横浜市の特別養護老人ホーム（特養）に暮らす男性（77）は、同県内にある湯河原温泉に1泊2日の旅行に発った。特養から介護タクシーに乗り込むとき、感極まった男性は「幸せいっぱい、胸いっぱい」と、声を震わせた。男性は脳梗塞で倒れ、特養に5年ほど暮らしている。左半身に麻痺があり、要介護度は「5」。言葉も思うように出てこない。妻が訪ねて来るたびに男性は「温泉に行きたい」と訴えていたという。

施設としての対応には限界があった。頼ったのは、介護旅行専門会社SPI（東京都渋谷区）の「あ・える倶楽部」。旅行には、同社から派遣された「トラベルヘルパー」が同行した。トラベルヘルパー（外出支援専門員）は、介護の技術と旅の業務知識を備えた専門家。多くが介護福祉士やホームヘルパー2級以上、看護師などの資格を持つ。食事やトイレ、入浴の介助などのほか、安全な旅行の企画や手配などの業務を担う。

温泉宿の料理（事前に小さくカットされた肉など）に舌鼓を打ち、ヘルパーの介助を受けながら温泉にゆったり浸かる。夫の笑顔に妻もうれしそうだ。男性は「また行きたい」と喜んだ。

もう一度旅をしたいが、「行けるはずがない」と旅行を諦めるお年寄りも少なくない。「旅を楽しみたいという気持ちは誰もが持っている。体が不自由になったからといって出かけられない



念願の温泉旅行に「幸せいっぱい」という要介護5の男性（左）

くなるわけではありません」と担当者。元気な頃と同じように旅を楽しめるのだ、という。10月末、「あ・える倶楽部」の事務所で行われた、トラベルヘルパーに興味を持つ人を対象にした説明会で、これまでに同社が提供した介護旅行の事例の一部が紹介された。そのいくつかを紹介しよう。東京都内に住む84歳の女性は、沖繩の宮古島に3泊4日の家族旅行に出かけた。要介護度は「5」。自力歩行が難しく車椅子を使っているが、介護施設に10年以上勤務し、ホームヘルパー1級の資格を持つ女性トラベルヘルパーが同行。女性は抱きかかえられて車椅子を降り、大きな浮袋をかぶって

かなざわ・たくみ 1973年生まれ。北海道出身。日本・海外メディアの記者として、犯罪事件や企業戦略などを取材する。2010年からフリー。高齢者の生活、事件、性愛などの取材を続けている。著書に『50歳からの孤独と結婚』（PHP新書）



宮古島で海水浴を楽しむ
要介護5の女性

孫と一緒に海水浴を楽しんだ。

事故で脊髄損傷を受け、車椅子生活を送る68歳の男性は、東京から真冬の北海道の最北端・宗谷岬に。要介護度は同じく「5」。猛吹雪の中、飛行機の欠航や車椅子の移動など、2泊3日の旅は一筋縄ではいかない。だが、持ち前の「勇気と元氣」で、トラベルヘルパーの介助を受けながら、厳冬の北海道を縦走したという。

軽度の認知症がある71歳の女性は、東欧のブルガリアを旅した。要介護度は「1」。女性が海外旅行が趣味だったことから、2人の娘が再び旅を楽しんでもらいたいと同社に問い合わせた。女性トラベルヘルパーが10日間のパッケージツアーに同行。ヘルパーは海外旅行の添乗業務に携わることができるとの総合旅程管理主任者

の資格を持つ。旅の記憶は残らないだろうと周囲は思ったが、女性は3年たっても「ブルガリアは楽しかったわ」と話しているという。

「お年寄りを済ませたい」を済ませたい

お年寄りの旅行意欲は旺盛だ。内閣府が2009年に行った「高齢者の日常生活に関する意識調査」では、普段の生活の楽しみとして32%が「旅行」を挙げている。「あ・える倶楽部」の利用者は、年間延べ500組前後。温泉地などへの旅行が多いが、遠くに住む孫の結婚式に出るために利用するケースも増えている。また、特に近ごろは故郷の墓参りに行きたがる要介護者が目立つという。

「残り少ない人生を振り返り、するべきことを済ませたい、という気持ちがあるようです」と同社の社長・篠塚恭一さん(53)は言う。墓参りは要介護者やその家族にとつて、たやすいものではない。墓地はときに高台や不整地にある。要介護者を背負って介助しなければならぬ場合も少なくない。その点、ヘルパーがいれば大き

な助けになる。道中の介助はヘルパーに任せられる。また、家族が旅行に同行した場合でも、日々の張り詰めた介護生活からちよつとは離れることができる。

介護旅行はリピーターが多い。中には年に10回以上の「旅行」を楽しむ常連客もいる。

「元氣になったら次はここに行くぞ、という目標ができてリハビリも頑張れるのです」

篠塚さんは旅の効用をそう語る。何に対しても前向きに取り組もうという意欲がお年寄りの心に湧いてくるのだという。

本人と家族の希望、医師の許可があれば、基本的にどのような状態の人でも依頼を受けており、要介護5の106歳のお年寄りの旅行を取り扱ったこともあるという。

同社は1991年に設立。旅行業の人材派遣をしていたが、しばらくして介護旅行に特化するようになった。きっかけは篠塚さんが、かつて旅行会社で添乗員を務めていたときに「他の人に迷惑をかける」と好きな旅を諦める高齢の客を多く見てきたことだった。

95年からトラベルヘルパーの育成を始め、98年からは独自企画の



要介護5の男性は
真冬の北海道を縦走した

旅行を催行したり、旅行各社のシニア向けプランにトラベルヘルパーを派遣している。さらに06年、介護旅行のプロを養成、認定するNPO法人「日本トラベルヘルパー協会」(東京都渋谷区)を立ち上げた。同協会(篠塚恭一理事長)の資格認定には「3級」「準2級」「2級」の三つのレベルがある。「2級」の三つのレベルがある。身近な人のちよつとした外出を支援(3級)▽要介護者の日帰り旅行を支援(準2級)▽宿泊を伴った介護旅行のサービスを提供(2級)——できるといった具合だ。「準2級」以上はトラベルヘルパーの「プロ」を想定し、不整地や人混みにおける車椅子の移動介助や、宿泊介護などの実地研修を受ける。将来的に介護旅行の旅程コーディネートや普及啓発などもできる「1級」を創設する計画だ。



10日間のブルガリア旅行を楽しんだ女性
(右から2人目)

旅行中は普段の生活と環境が異なるため、高齢者の体調は変わりやすい。着衣の調節や水分の補給、施設内の空調などさまざまな配慮が欠かせない。その点、日常生活の介助とは異なるのだ。これまでにトラベルヘルパーの資格を取得した人は約600人。平均年齢は50歳くらいで男女比は4対6という。女性ヘルパーが多いのは、利用者も女性が少し多いからだ。話し好きの女性客には、女性ヘルパーのほうが相性はいいのだろう。

現在、介護旅行を支援する「トラベルヘルパーセンター」が全国11カ所にある。同協会が認定するトラベルヘルパーが観光情報などを提供している。「介護や旅行の新たな可能性を広げたい」（篠塚さん）という目的で、各センターでは、地元の観光協会や介護タク

シー会社と連携するなど、新たなビジネスを展開しているという。

決して安くはない しかし諦めない

ところで気になる介護旅行の料金だが、「あ・える倶楽部」では本人とヘルパーの旅行代金（交通費、宿泊費、食事代、施設利用料など）に、3段階に設定される介護料金（基本料）が加わる。

1日の基本料は、「軽度要介護（要介護認定を受けていない人、要支援1、2）の人」は2万1600円（税込み、以下同じ）▽「要介護1、2の人」は2万4840円▽「要介護3以上の人」は2万7000円。海外旅行は割り増しになり、行き先によって追加料金が発生することもあるなど「一人ひとりの状態やケースに応じたオーダーメイドの旅」（同社）なので、相談したほうがいい。

決して安くはない。また、介護保険は適用外だ。それでも介護旅行の需要は大きいようだ。

「いつときでも、現実を忘れることができる。それが旅行の魅力。部屋に籠もっていたらダメだ」

そう話すのは、東京都新宿区の松本修一さん（83）。11月上旬、

「あ・える倶楽部」の事務所に、次の旅行の相談をしにやってきた。

松本さんは自称「根っからの旅好き」だ。埼玉県内で長年開業医として働いてきた。

「仕事が忙しく、自分の時間が持てなかったが、子どもにも診療所を任せた10年ほど前から、ようやく旅に行けるようになった」

と言う。一眼レフのカメラを買って「どこに行こうか」と考えていたものの、医者を継いだ娘が一人旅を許してくれない。松本さんが心臓の病気をもち、ペースメーカーを使用しているからだ。

要介護度は「1」。妻と離別して、現在は有料老人ホームに一人で住んでいる。子どもたちに仕事を休ませて旅に付き合わせるわけにもいかない。そこで「あ・える倶楽部」を頼っている。

松本さんは、年に4、5回は同社のサービスを利用するという。



撮影した写真を見ながら
談笑する松本さん
(あ・える倶楽部事務所で)

特に今年の春に行つた京都が忘れられないようで、「舞妓さんたちが可愛かった」と目じりを下げる。自慢のカメラで撮影した写真アルバムを広げ、同社のスタッフたちと思ひ出話に花を咲かせる。

「まだまだ行つたことがないところがたくさんある。向こう10年は旅行に発ちたい。将来、車椅子になつたとしても、旅行に行ける」と松本さんは笑顔を浮かべる。

「するべきことを済ませたい」という思いは人生の終盤に高まるのだろう。その思いを、体が不自由だからと諦めることはない。要介護者よ、旅に出よう――。

今週のポイント

- ▼墓参りから海外旅行まで介護のプロ、トラベルヘルパーがサポート
- ▼「あそこに行く」と目標ができる旅行はリハビリ効果も期待できる
- ▼同行する家族も日ごろの介護生活の緊張からひととき離れられる